義務教育課程における不登校児童・生徒の成長（発達）と高校生とのつながり方
ー先行研究をまとめて高校生としてできることを考えるー

3年4組16番　河野　亜優美

１．はじめに

私は中学3年の中頃から教室に向かうのが辛かった。現在は義務教育課程を終えたため、自ら出席日数などを考えて自分にできる範囲での登校を続けている。しかし、義務教育過程での不登校・登校拒否・学校への行きにくさはなかなか理解されにくい現状がある。実際、私の兄弟も不登校である。これはどうしてなのだろうか。私1人の力では何もできないかもしれないが、このことについて国際生にも知ってもらって、何か協力を仰げないかと思い、この研究に取り組むことにした。

２．問い・仮説

近年、不登校児童・生徒が増加している。文部科学省（2021）によると、長期欠席のうち義務教育における不登校児童・生徒は196,127人（前年度181,272人）であり、前年度から8.2%の増加が見られる。また、不登校になった要因としては「無気力、不安」が小中学生共に1位を占めるが、「いじめを除く友人関係をめぐる問題」が上位の要因となっている（小学生4位・中学生2位）。このことから、同じような年代の子たちと話ができない状態にある不登校児童・生徒に対して、教員や親だけのサポートで本当に社会に踏み出す1歩を歩み始められるのかと考える。では、本当に「適応指導教室」「通級」だけで彼らは通常の通学児童・生徒と同じような成長・発達ができるのか、という問いが生まれた。私の答えはできない、である。同じような成長・発達ができないのならば、子ども同士でつながるツール・現場を提供できれば、不登校児童・生徒の成長・発達に貢献できるのではないかと考えた。そこで私は高校に小中学生を招いて、話せる場を作るという子どもたちでつながるツールを提案する。

3．前提条件・知識・検証方法

子ども同士でつながるルーツが実績を残すための根拠として、先行研究をまとめることをこの研究の研究方法とする。

第一に成長・発達・発育の違いとはなんだろう。成長は身長や体重のような体の大きさの伸びを表す。発達とは歩けるようになったり、言葉が喋られるようになったり身体的さらに神経精神的な機能の伸びを表す。発育は成長と発達を合わせて総合的に評価する言葉である。この研究では「発達」が正しい表記だと考えるため今後のは「発達」と表記する。

一般に「通級」というと特別支援教育のトビラによると「通常の学級での学習や生活におおむね参加でき、一部特別な指導を必要とする児童生徒に対して、各教科等の授業は通常の学級で行いつつ、障害に応じた特別の指導を「通級指導教室」といった特別の場で行う特別

支援教育の形態の一つ」とある。そしてこれの対象になる児童・生徒は以下に記す通りだ。

1. 弱視者
2. 難聴者
3. 肢体不自由者
4. 病弱者・身体虚弱者
5. 言語障害者
6. 情緒障害者
7. 自閉症者
8. 学習障害者
9. 注意欠陥多動性障害者

ここから分かることは情緒障害者でも通級は可能であることだ。しかし、不登校児・生徒は適応指導教室に通うパターンの方が多い。適応指導教室とは適応指導教室（学校支援センター）の取り組みによると「不登校児童生徒の集団生活への適応、情緒の安定、基礎学力の補充、基本的生活習慣の改善等のための相談・適応指導を行うことにより、その学校復帰を支援し、もって不登校児童生徒の社会的自立に資することを基本にする」とある。つまり学校とは別の施設にて人との関わり方を学ぶ場所である。そのため「通級」と「適応指導教室」は別物である。この研究では「適応指導教室」に通う小中学生にフォーカスして進めていきたいと思う。

また、先行研究の調査をしたが、小学生の情緒障害児通級指導教室・適応指導教室をメインに取り扱う論文が見つからなかったため中学生にフォーカスをして調査結果をまとめていく。検証方法としては2つの先行研究のデータをまとめる。

4. 検証結果

1つ目のデータ、藤本・井澤（2008）は「適応指導教室」に通う18人の生徒の困難な点・目標・登校状況などをまとめているものである。また、「適応指導教室」の改善すべき点などもまとめてある。ここから得られることは生徒の困難な点がほぼ全てコミュニケーション

に関係していることである。

Table 2　通級生徒の困難な点、目標、登校状況

事例	困難な点	目標	登校状況
A	学校不適応	登校	現在登校できている
B	対人関係	友達作り	現在登校できている
C	対人関係	社会性を養う	完全に登校できない
D	学校不適応	登校	父親が毎日登校に付き添う
E	対人関係	いじめの問題解決	時々登校，別室登校
F	対人関係	友達作り	登校している
G	学校不適応	社会性を養う	完全に登校できない
H	不注意	プランニング	登校している
I	多動，対人関係	パニックの改善	別室登校
J	対人関係	障害告知後のカウンセリング	登校している
K	対人関係	友達作り	登校している
L	学習の困難	学習の仕方	登校している
M	不注意	学力意欲の向上	登校している
N	対人関係	社会性を養う	登校している
O	不注意	障害告知後のカウンセリング	登校している
P	対人関係	社会性を養う	登校している
Q	対人関係	社会性を養う	別室登校
R	学校不適応	登校	一人で登校

「学習の困難」以外はほぼ全てコミュニケーションと関係してると考える。また、目標にある「社会性を養う」「友達作り」はコミュニケーションがうまくできないと達成できないことである。このことから、不登校生徒のほぼ全てがコミュニケーションに何かしらの苦手意識があり、またコミュニケーションに対して克服したいという意志があることがわかった。

２つ目のデータ、渡辺・蒲田（1999）は社会的なサポートと生徒自身の社会的スキルについてまとめてあるものだ。ここからは不登校生徒が周りに何を求めているのか、どのような人が周りの人だと考えているのかという不登校生徒の認識についてのデータである。ここから得られることは３つある。１つ目は趣味や自由な時間の共有相手の存在をあまり認識していないことだ。このことから、これに対して不満を感じていると筆者は記載している。これもコミュニケーションの取り方に関係していることである。このことから筆者は、情緒的サポートとプライベートサポートを多く得ることが、団体との関わりを導く可能性があると示唆している。2つ目は不登校生徒は通常の登校をしている生徒に比べて、同年代の友人との関わりが少ないことが浮き彫りになったことだ。例えば、学校に行けないことで娯楽関連的サポートを友人から多く得ることが困難な状況にある。つまり娯楽関連的サポートを知人や先生という目上の人で補われているということになる。また、プライベートなことについても友人ではなく、家族からのサポートを受けている傾向が強い。３つ目は親からの分離をして、友人との密接な関係を構築したいと望んでいることが推測できることである。このことより、学校以外の場所で他人と出会い関わっていくことができるような場所がとても重要になってくるのだ。

5. 考察

検証結果からは以下のことを考察できる。１つ目のデータからは、不登校になってしまった生徒は何かしらコミュニケーションに対してマイナスイメージを持っているのではないか

ということだ。コミュニケーションが苦手になってしまったが故に学校生活に馴染めず、友人関係で揉め事が起きてしまう。こうなると、円滑な社会生活が危ぶまれることになるため、自らの自己防衛機能によって学校に行けなくなってしまったのではないか。２つ目のデータ、1つ目のわかったことからは、趣味の共有相手がいないことに対する不安はコミュニケーションを他者と取りにくいが故に起きている弊害だと考える。己の言葉で伝えたいことを伝えきれないから趣味という話の幅が広いことに対して話が出来ず、相手の話を聞いて話題を転換していくことも難しいのではないだろうか。2つ目のわかったことからは、先生や知人という歳が離れた人からのフォローではなく、同年代もしくは年の近い人からのフォローが必要なのだろうと考える。これは仮説でも考えていた事なので仮説は合っていたと言える。3つ目のわかったことからは、やはり新しい関係性を他人と結ぶこと、すなわち社会への前進を不登校生徒も求めているということだ。このことから、仮説にある高校生と話せるツールを作成することは有益であると考えられる。全体考察としては、やはりコミュニケーションが引っかかるものになっている可能性があるため、そこの引っ掛かりを少しでも軽減させることができれば、社会復帰の第一歩になるのではないか。そこのアプローチツールに高校生という年の近い私たちが入ることで、相談員や教師、親とは違う対人関係の構築の学習になるのではないかということだ。

6. 結論・今後の課題

結論としては、学校に来るにしても社会に出るにしても必須であるコミュニケーションに苦手意識・課題を持っているという状況を自ら理解しているであろう生徒に寄り添う難しさを痛感した。この状況を打破するために高校生から関わりを持とうとすることは、不登校生徒の固まった心を溶かすためのアプローチになるのではないかと思った。１つ目のデータは「適応指導教室」の職員という立場の人が書かれたもの、２つ目のデータは記載がないが人文・社会科学を研究している人の立場から書かれたものである。この2つのデータから分かることは、立場は違えど、研究をする人は不登校になってしまったことに対して何も悪いことだとは考えていないことだ。マイナスのイメージがないが故に踏み込んだ研究ができると考えた。また、多角的な目線からの研究を読むことによって、考え方の違いや発想の違いをみることができた。考察に対しては有益であると言うことの裏付けを2つ目のデータから取れた。しかし、話を聞けたとしても聞いた内容の口外をしないことなどの守らなければいけないことがあることを高校生が理解していないといけないという問題が発生した。これを解決するためには実際のカウンセラーに講座を受けた高校生のみが話を聞くというシステムにしてもいいかもしれない。

今後の課題としては、3にも記載したが小学生にアプローチした論文を発見できなかったため、中学生にフォーカスした考察に偏ってしまったことである。そのため、今後の情報収集の方を検討する余地がありそうだ。しかし、歳の近い人と話せるようになれば社会復帰がうまくいくのではという最初の問いの関していうのであれば、私たちと歳の近い中学生にフォーカスした考察になってよかったのではないだろうか。また、先行研究のデータが古かったことも懸念点である。データの古さは思考の食い違いにも発展しかねないが、研究の取り掛かりが遅かったこともあり、最新の研究にフォーカスした探求ができなかったことが悔やまれる。

7. おわりに

この研究をしながら思っていたことは、みんな無理して学校に行かなくていいんだよと声を大にして言いたいということだ。無理な時に無理をするとろくなことが起きないから、無理な時は無理をしないことが大事だ。しかし動いた方がいいのでは？と思って「適応指導教室」にいけている児童・生徒は偉いないかと思っている。また、高校生でもコミュニケーションが苦手な人は多いであろうから、今度は高校生にフォーカスをした研究もしてみたいと思っている。この研究も進めていきたいため、次にまとめる機会があれば、実際に高校に小中学生を呼んで話をしてみる実証実験もしてみたいところだ。そこで得られたデータはきっと不登校児童・生徒の研究に有益なものになるだろうし、体験した人全員の心の変化は優しい社会を、みんな違うからみんなで支え合う社会になるために大事なものになると考える。学校生活は楽しまなければ。

8. 参考文献・出典

・藤本優子・井澤信三（2008）：中学生における情緒障害児通級指導教室の現状に関する一考察
https://hyogo-u.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=3244&item_no=1&attribute_id=17&file_no=1
・渡辺 弥生・蒲田 いずみ（1999）：中学生におけるソーシャルサポートとソーシャルスキル ： 登校児と不登校児の比較
https://shizuoka.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=7512&item_no=1&attribute_id=31&file_no=1
・文部科学省（2021）：令和2年度 児童生徒の問題行動・不登校生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要
https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext_jidou02-100002753_01.pdf